

<研究報告>

ガーナの政党政治とナショナリズムの目覚め —クワメ・ンクルマの政治思想（五）—

阿久津昌三 信州大学教育学部

キーワード: ンクルマ, UGCC, CPP, ナショナリズム, アクラ騒擾

1. ンクルマ, 祖国に帰る

ンクルマは, 統一ゴールドコースト会議 (United Gold Coast Convention 以下, UGCC と略す) について, 『自伝』のなかで次のように語っている。

「ある日, ゴールドコーストに戻っていたアコ・アジェイ (Ako Adjei) から手紙を受けとった。そこには私にゴールドコーストに戻って UGCC の総書記になってほしいと書いてあった。UGCC は民衆の広い層のなかに知識階級の指導権を確立するという問題に直面していた。アメリカとイギリスでの私の政治活動をアジェイが知っていて, 私を総書記に招くべきだと実行委員会に推薦したというのである。さらに実行委員会が, 1 か月 100 ポンドの給料のほかに自動車を 1 台つけると申し出ているとも付け加えてあった。私は給料にも自動車にもあまり興味をもたなかった。総書記という仕事はまことに魅力的だった。祖国に戻って, 外国で覚えた党組織の経験を自分の祖国の民衆のために生かすという, 待ち望んでいた機会がついにやってきたと私は思った。しかし現実のこととなるとあまりも話がうますぎたので, 私はまず警戒しゴールドコーストの動きをしばらく見守ろうと決心した。UGCC の運動を始めた人びとの本当の精神, 動機, 目的が何かを理解することが必要だった。時間を稼ぐために, 申し出を考慮中だと私はアコ・アジェイに返事した」(Nkrumah 1957: 61; ンクルマ 1960: 68) (野間寛二郎訳による。一部改変。以下同じ)。

ンクルマはオクスフォード大学で特別講師を務めていたトニー・マックリン (Tony Maclean) からゴールドコーストの政治情勢を聞きだしている。かれは少し前にゴールドコーストに数か月滞在して最近イングランドに戻っていた。かれはイギリス共産党員でもあった (Sherwood 1996: 191)。

しばらくすると, ンクルマは J・B・ダンクァ (J. B. Danquah) から「ぜひ総書記になってほしい」と書かれた手紙を受けとった。ダンクァは UGCC 設立の中心人物でもあり「政界の長老」でもあった。

ンクルマはジョージ・パドモア (George Padmore) やフェナー・ブロックウェイ (Fenner Brockway) (イギリス独立労働党員) とともに相談したりした。ンクルマは西アフリカ国民事務局 (以下, WANS と略す) で会議を開き「申し入れを受けたほうが良いだろうということに決まった」と語っている (Sherwood 1996: 191-192)。

ンクルマはアジェイとダンクァに正式に申し出を受け入れる旨の手紙を書いた。これに

よってンクルマは祖国に帰ることが決まった。

バジル・デヴィッドソンは『ブラックスター』という標題でンクルマの伝記を書いている。この本はとても美しい文章で始まる。

「第2次世界大戦が終わって2年を幾分経った1947年11月、もうこれ以上の悪い天気がないというような灰色の冬の日、アクラ号はリバプール港を出た。アイルランド海峡の風に舳先をあわせると、大西洋を南に旋回した。この航海は西アフリカに向かう数えきれない植民地への航海という意味ではまったく異なるところはない。しかし、ひとつ違いがあった。しかもとても大きなものだ。この2人の男たちはその時それに気づいていなかった。歴史は修正することはできなかった」(Davidson 2007 (1973): 9)。

ンクルマが、WANSの同志であるコジョ・ボツィオ(Kojo Botsio)とともに、ゴールドコーストに向けてイギリスを離れたのは1947年の11月14日のことである。

ンクルマはリバプール波止場で官憲の厳しい取り調べを受けた(Biney 2011: 35)。

「リバプールの波止場で、役人との間で予想もしなかった面倒がもちあがった。私には知らせずに、警察がロンドンでの私の活動について多くの情報を集めていたのだ。私が共産主義者の会合に出席していたことが、特にかれらを不快にさせていた。しかし長つたらしい尋問のあとで、役人はしぶしぶ私の旅券にスタンプを押してくれて、私は出国を許された」(Nkrumah 1957: 63; ンクルマ 1960: 69-70)。

途上でンクルマは2週間シエラレオーネのフリータウンに滞在した。ボツィオはゴールドコーストのアチェム・アブワクワ大学の教師として就職するために帰って行った。

フリータウンではウォレス・ジョンソン(I. T. A. Wallace-Johnson)の家に泊まり、政治指導者たちと大いに議論をした。

そして、フリータウンからリベリアのモンロビアに向かう。しかし、リベリアでンクルマはウィリアム・タブマン大統領(William Tubman)と会うことはできなかった。かれが地方に旅行に出ているためである。数日の停泊後に、ンクルマは、モンロビアから定期航路の次の寄港地であるゴールドコーストのタコラディに向かった。

ンクルマは、船のなかで、いままでのイギリスの官憲のやり方を考えると、「タコラディの港の役人たちには、リバプールで私の乗船したことが通告されているに違いない」と思いつつ、かれを乗せた船はタコラディの港に入った(Nkrumah 1957: 65)。

「タコラディでは、移民局の役人と顔を合わせなければならなかった。私は役人のひとりのアフリカ人のところへおずおずと近づき、眼を伏せて、問題の旅券をさしだした。白い小さな摘要欄の上に書いてある名前が急に、その欄に不釣り合いなほど大きくなっているように、私には思われた。役人は旅券を手にもったまま、すぐに聞こうともしなかった。私は何か悪いことの起こるのを覚悟して、眼をあげた。相手は額から眼玉をつきだすようにして、驚いて私を見つめていた。やがてその口がゆっくり動き、低い声でいった。

『それじゃ、君がクワメ・ンクルマだね!』。私はうなずいた。万事窮すだ、と思った。かれは無言のまま、ついてくるように合図し、私はそれにしたがった。他の船客に聞こえな

ガーナの政党政治とナショナリズムの目覚め

いところまでくると、かれは急に態度を一変した。私の手を力いっぱい握り、かれらアフリカ人たちは、私の噂を聞いており、私がかれらを助けるために祖国に戻ってくることを知って、私の到着を毎日心配しながら待っていたと語った。そして税関を自由に通ってよいこと、私の書類やその他の手続きは自分が済まして、旅券は適当な時期に私に戻すといった」(Nkrumah 1957:66; シクルマ 1960: 72)。

それではシクルマがイギリス官憲の監視下におかれたのはいつ頃からなのだろうか。幸いにしてシクルマの行動を記録したイギリス保安局の機密文書が開示されている。フィゲイラによると、シクルマが最初にアメリカ保安機関のレーダー網に捉えられたのは 1942 年 12 月 6 日のことである。ペンシルヴェニア大学ヒューストン・ホールで行なわれた「戦時のアフリカ」と題するシクルマの演説がアメリカ当局の眼にとまった。

これを受けて、アメリカ官憲は在米イギリス保安部に通報したようだ。在米イギリス保安部はロンドンの保安局長宛てに「シクルマについて何か記録があるかどうか」を照会している。戦争が終わり 1945 年 5 月にはシクルマがロンドンに向けてアメリカを離れたことがイギリス保安局に通報された (Figueira 2007: 155-156)。

シクルマとイギリス共産党のモード・ロジャーソン (Maud Rogerson) との関係がにわかには活発になったのは 1947 年 5 月 28 日だったと電話による傍受メモは明らかにしている。

また、シクルマとイギリス共産党のマイケル・キャリット (Michael Carritt) との間で傍受された手紙の内容も報告されている。これを受けて、1947 年 7 月 14 日に、シクルマのロンドンでの活動が、イギリス保安局のパーシー・シリトー卿 (Sir Percy Sillitoe) からゴールドコーストのアクラの R・W・F・バランタイン警視総監 (R. W. F. Ballantine) に報告された。これは、シクルマがリバプールの波止場を離れる 4 か月前のことである。

シクルマがゴールドストに戻る計画を立てていることは、モード・ロジャーソンとの間で率直な話し合いがなされていたその内容が盗聴されている。これを受けてゴールドコーストの警察はシクルマがいずれはゴールドコーストに戻ってくる時のための準備体制にはいていた。

さらに、シクルマがゴールドコーストに戻ってほしいという申し出に応じたとの情報がパーシー・シリトー卿からバランタイン警視総監に報じられたのは 1947 年 8 月 16 日のことである。シクルマがリバプールの波止場を離れる 3 か月前のことである。

イギリス保安局によって傍受されたイギリス共産党からフランス共産党に送られた手紙によって、シクルマが 1947 年にフランスのフランス共産党を訪問したこと、また、この訪問がイギリス共産党によって手配されたものであること、さらに、シクルマがフランス領西アフリカで政治活動をするためにフランス共産党に支援をもとめたことも確認されている (Figueira 2007: 156)。このようなイギリス保安局の諜報活動のネットワークに行動を曝されながらシクルマは祖国に帰ってきた (Walton 2013: 216-221)。タコラディからリバプールに向けて旅立ったのが 1935 年 8 月 6 日であった。それから 12 年の歳月が経ったことになる。

2. ナショナリズムと独立運動

2.1 UGCC の実行委員会

UGCC は、当初、ゴールドコーストの富裕層及び高学歴層から構成されていた。つまり、法廷弁護士、実業家など「エスタブリッシュメント」（既得権層）を代表する集団からなりたっていた。この政党の中核となるのが「実行委員会」である。

政治学者のデニス・オースティンは、「統一ゴールドコースト会議の実行委員会」（1961年）と題する論文のなかで、「私が昨年ガーナに滞在した時、ダンクァ博士は、UGCC の実行委員会が所有する初期の『議事録』を読み書きすることを喜んで許可してくれた。私にはその『議事録』がきわめて興味あるものであると思われた。なぜなら、それは植民地政府との不和が頂点に達し、そして最初に UGCC——その後、その党派の過激な所産として会議人民党 (Convention People's Party, 以下 CPP と略す) を生みだした、1947年から1951年までの時期を網羅しているからである。『議事録』は慎重かつ明確に書かれている。また、それはンクルマの『自伝』の最初の部分（第5章から第12章まで）と対応している——それ自身情報として価値のあるものであり——植民地行政が後退し始め、ナショナリストたちが輩出したこれらの時期に関わるンクルマによる弁明を検証し、それを補い、時には修正するものである」（Austin 1961: 273）と記述している。この意味で「議事録」はンクルマの『自伝』の記述と比較対照することができるきわめて重要な文書である。

UGCC の設立のきっかけとなった「会議」（Convention）というアイデアは、1947年1月頃に、材木商のグラント（George Alfred Grant, 通称 Paa Grant）のセコンディにあるポアシエ通りの古い事務所で、「ダンクァ、ウィリアムズ、ブレイという3人の弁護士たちが集まった時、かれらの個人的な会話から生まれた。新しい政治運動のあり方を模索してみたいと考えたのはダンクァの発案によるものであった」という（Austin 1961: 280）。ダンクァは、カカオ流通をコントロールするマーケティングボードの代表や復員兵同盟の法律顧問、青年会議運動の書記、立法評議会の代表など数多くの役職に就いていた経験から、新たな運動を模索していたのである（Austin 1961: 279）。

1947年4月にソートポンドのキャナン・ロッジで開催された特別会議で党を結成する構想が芽生えて、準備と宣伝に費やした数か月後に、UGCC は1947年8月4日に設立された。グラント議長が就任演説を行なった（Austin 1961: 279; Austin 1970 (1966): 52）。

UGCC は1947年9月20日に実行委員会を設置している。実行委員会のメンバーは、G・A・グラント（議長、材木商）、R・S・ブレイ（R. S. Bray）（副議長、弁護士）、J・B・ダンクァ（副議長、弁護士）、F・A・アウナー＝ウィリアムズ（F. A. Awooner-Williams）（会計係、弁護士）、W・E・A・オフォリ・アッタ（W. E. A. Ofori Atta）、J・クィスト＝ゼルソン（J. Quist-Therson）、E・アクフォ・アッド（E. Akufo Addo）（弁護士）、J・W・デ・グラフト＝ジョンソン（J. W. de Graft-Johnson）（弁護士）、W・O・エスマン（W. O. Essuman）（書記補佐）、A・メンズ（A. Mends）（財務書記）、K・ベンツイ・エンチル（K. Bentsi Enchill）（副議長）から構成された（Austin 1961: 280n）。

ガーナの政党政治とナショナリズムの目覚め

「実行委員会は月に1度開催すること、週刊紙を発行すること（「スター」*Star* 後に「ステーツマン」*Statesman*）、そしてこれが宿命的な決定となるものであるが、常勤の有給の書記を雇うことを決定した。かれらは多忙な弁護士たちであり実業家たちであった。かれらは会議には意欲を燃やしていた。しかし、手綱を握る準備をしているが、かれらは荷馬車を引っ張る自ら進む馬を欲しがっていたのである」（Austin 1961: 280）。

ンクルマが「荷馬車を引っ張る」という役割をはたす総書記に就任することを承諾すると、かれらは寄付金 175 ポンド 10 シリングのなかから船賃として 100 ポンドをンクルマに送金した（Austin 1961: 280; Austin 1970 (1966): 53-54）。その後、第2回の実行委員会が 10 月 18 日、第3回の実行委員会が 12 月 6 日に開催された。この期間、ンクルマは総書記に就任するためにゴールドコーストに向かっていた。やがてンクルマはタコラディに着いた。タコラディに着くとセコンディに住んでいるンジマ出身の弁護士で、UGCC のメンバーであるブレイに連絡してかれの家に泊まっている。さらに、ンクルマはタルクワで 1 泊し、12 年ぶりに母親に会ってからソートポンドにやって来たのである。

12 月 28 日、ンクルマは実行委員会のメンバーに紹介された（Austin 1961: 280）。しかし、『自伝』では「UGCC は 1947 年 12 月 29 日にソートポンドで生まれたのだ」（Nkrumah 1957:69; ンクルマ 1960:75）と書かれている（このように「議事録」と齟齬があることは興味深い事実である）（Austin 1961: 280）。「議事録」によると、この時、ンクルマは「私はあなた方と一緒にできるのがとても嬉しい」と述べ、「もしあなたがたが必要ななら何なりとお申しつけくださいと言う以上に今のところ何も申しあげることができません」と挨拶したという（Austin 1961: 280）。これに対して、ンクルマは、「委員たちは私を大いに歓迎してくれて、いろいろな歓迎の言葉を述べ、その後で仕事の打合せをした。最初の問題は、私の総書記への任命のことだった。これをまず確認することに、全員が賛成した」（Nkrumah 1957: 70; ンクルマ 1960: 76）と語っている。しかし、「給料の問題が出ると議論が百出した」とンクルマは語り、次のように給料問題を説明している。

「100 ポンドの給料に自動車をつけるというのが、私を呼ぶための一種の餌だったことを私は知った。というのも、UGCC（綱領も大衆組織も何ひとつもっていなかった）は資金が全然なく、銀行に口座さえもっていないことがわかったからだ。100 ポンドの給料などというのはまさしく論外で、その代わりに月に 25 ポンドだそう、と委員たちはいいだした。しかしこの 25 ポンドを捻出することも連中には難しいことを知って、私は住居と宿泊費さえ保証してくれれば、無料で働こうと申し出た。部屋にいた全員が驚いて私を見つめた。そのひとりひとりが年に 2,000 ポンドから 3,000 ポンドの収入を得ていたので、私がよほどひねくれた性質の持ち主であるか、それともなにか連中の気のつかないずるいことでも企んでいるかと考えたようである。後に私をよく知るようになってから、委員のとくに一人はいつも、私が金に全然無関心で、金の値打ちを知らないと、冗談のようにいった。しかしその時は、私の申し出が連中には理解できなかったのだ。とって成り行きにまかせるわけにもいかず、私の申し出をしりぞけて毎月 25 ポンドはらうと主張した」（Nkrumah

1957: 70; シンクルマ 1960: 76)。

シンクルマが語る「100 ポンドの給料に自動車をつける」、特に「自動車をもつこと」は「エスタブリッシュメント」(既得権層)の文化でもあった。Y・A・アッピアの歴史小説『血の土曜日』(2004 年)によると、自動車を乗り回す実行委員会の委員たち——委員たちはみんな自動車をもっているが、集会の時には相乗りをして集まってきた。ダンクァの運転するフォードの助手席にアクフォ・アッド、後部座席にオフオリ・アッタ。オフオリ・アッタはファッショナブルな丸い鼈甲製のメガネをかけていた。シンクルマもアコ・アジェイの自動車で行く委員会の会場に駆けつけてきたという (Appiah 2004: 30)。また、オースチン A 40 Devon Saloon に乗るニイ・ドゥオドゥ・アンクラーという委員なども描かれている (Appiah 2004: 47)。

UGCC の実行委員会はイデオロギー的にも 2 つの集団に分散していた。ガーナ大学の歴史学者クワメ・アーヒンは次のように述べている。

「UGCC の指導者たちは多忙で相対的に富裕な人びとであり、かれらの生活習慣はゴールドコーストの大多数の人びとのそれとは事実上違っていた。かれらは『革命』という不意の抜本的な変化ではなく、制度のなかで徐々に変えるという『改革』を目標にしていた。かれらは『行動する doing』よりも『執り行う taking』ことを良しとしていた。例えば、政治的諸目的のために地についた「草の根」レベルで人びとを動員するというよりは、生活様式はアフリカというより『イングリッシュネス』のもので、かれらは庶民のものと混ざり合うことが難しいと理解していた。かれらは自治の獲得のために組織化された潜在的有権者に依存するというよりも、善意とかフェアプレイの精神とかイギリスの呪文に依存しがちであった。かれらは熟練された政治的権威をもった指導者たちであるべきであるというものには明らかに適していなかった。人びとの指導者としてかれら自身無能であることを認めていたから、かれらは総書記としてシンクルマに祖国に戻るよう要請したのである。シンクルマは、来て、見て、征服したのだ」 (Arhin 1990: 13)。

「議事録」によると、年俵 250 ポンドのことは話し合いのなかでも出たが、シンクルマは 12 年間祖国を離れていたので「年俵 250 ポンドが地方の諸条件で現在の生活水準を満たすものかどうかわからない」と述べた。そこで、議長がシンクルマを弁護して給料を月額 25 ポンドの固定給として住宅手当と自動車を無料とすると提案したという (Austin 1961: 281-282)。また、実行委員会では、常勤の有給の書記とは単なる運動の責任者なのか実行委員会の正委員なのかという問題には結論をだしてはなない。ここにも実行委員会とシンクルマとの間にズレが生じている。シンクルマと同じジンジャ出身のブレイも「新しく任命された書記を信用している」とし、「シンクルマが自分の組織であるかのように『会議』を利用することを希望する」と表明している (Austin 1961: 281)。だが、実行委員会の委員のなかにはシンクルマに対して不安を覚えるものもいた。ダンクァを筆頭とする実行委員会は「会議の目標と目的に影響を及ぼす範囲内で、総書記が世界のイデオロギー上の対立に対してどのような個人的な態度をとっているのか、またどのように反応するのか試験をした」のだと

いう (Austin 1961: 281)。これに対して、ンクルマは 1948 年 1 月 20 日に実行委員会を開催して、運動を組織するために委員会に「綱領」を提出した。最初に、ンクルマは、「綱領」では「影の内閣」(Shadow Cabinet)をつくることを提言している。

「実行委員会は、影の内閣をつくることを、なるべく早く、真剣に考慮しなければならない。影の内閣は、われわれが独立を達成した時、すぐに決定しなければならない各閣僚の仕事をあらかじめ研究しておくため、特別に選ばれた人びとによって構成されなければならない。予想される時期よりも早く自治政府の樹立が認められた場合に、影の内閣は、われわれのほうに生ずる準備不足を取り除くことになるだろう」(Nkrumah 1957: 71; ンクルマ 1960: 77)。

ンクルマは、UGCC の「綱領」を実現するための組織活動を次のような 3 つの時期に分けている。

「第 1 期」(a) さまざまな組織を UGCC のもとに統合する。個人的にはともかく、さまざまな政治・社会的組織、教育者、農民、婦人の組織、原住民協会、労働組合のメンバーに、UGCC への加入を問い合わせる、(b) すでに設立されている支部の検討と、すべての町と村への支部の設立を第一期の重要な活動目標とする、(c) 植民地州、アシャンティ、北部諸領、トーゴランドのすべての町村で支部会議を開くこと。各町村の責任者に支部の財産責任者となるよう説得する、(d) 支部のあるところでは、活発な週末講座を開いて、自治政府のための大衆的な政治教育をはじめめる。

「第 2 期」組織力を調べるために、政治的な危機を利用して、全国に絶えずデモンストレーションを展開することを目標とする。

「第 3 期」(a) 自治政府または民族独立のための憲法を起草するために、ゴールドコースト人民憲法会議を召集する、(b) 自治政府樹立の要求を貫徹するための組織的デモンストレーション、ボイコット、ストライキをおこなう (Nkrumah 1957: 71-72; ンクルマ 1960: 77)。

ンクルマの行動計画は、「第 1 期」全国に支部を設置すること、政治教育をおこなうこと、「第 2 期」組織力を確認するために全国規模のデモンストレーションを展開すること、「第 3 期」独立に向けての憲法会議を召集すること、全国規模のデモンストレーション・ボイコット、ストライキを通して自治政府を要求することであった。

2.2 アクラ騒擾

ンクルマとダンクァは 1948 年 1 月の間中ゴールドコーストの町々での集会で演説した。2 月にはアクラでヨーロッパ製品のボイコット運動と復員兵によるデモが突発的に起きた。いわゆる「アクラ騒擾」(Accra riot) と呼ばれるものである。ンクルマが UGCC の総書記に就任してからほんのわずかの後のことである。

2 月 20 日(金曜日)にはンクルマは復員兵同盟が手配したアクラのパラジウム映画館での民衆集会で「現代の思想戦について」と題して演説している。ンクルマは「話し終わったあとの聴衆の反応から、ゴールドコーストの民衆の自覚が、自由と独立のためにかれら

を団結させ蹶起させる時期にすでに到達していることをこれまで以上に知った」と語っている (Nkrumah 1957: 76; シンクルマ 1960: 80)。また、ダンクァも「UGCC の指導者の全員が民衆を失望させることがあっても、クワメ・シンクルマだけは民衆を失望させない」と聴衆に向かって呼びかけた (Nkrumah 1957: 76; シンクルマ 1960: 81)。この時までシンクルマとダンクァとの間に亀裂はない。しかしその関係は蜜月関係というものでもない。

シンクルマ、ダンクァに加えて、アコ・アジェイ、そして復員兵同盟のベン・タマクロー (Ben Tamakloe)、F・E・ラリエラ (F. E. Laryea) が 9 千人の聴衆に向かって演説した (Austin 1961: 281)。例えば、ダンクァの息子も 1943 年に志願兵となっており終戦までビルマ (現在のミャンマー) にいたのである。

ビルマがイギリスから独立したのは 1948 年である。インド、ビルマと続くアジア諸国の独立はゴールドコーストの民衆にとっても大きな起爆剤となっていた。ましてや復員兵たちは中東、アジアの戦場に派遣されており世界各地のナショナリズムの動きを感じとっていた。

第 2 次世界大戦は、第 1 次世界大戦と同様に、「帝国の総力戦」の様相を呈していた。イギリスの場合、インドで 250 万人に及ぶ人びとを動員したのに対して、アフリカからは 60 万人近くが動員された (木畑 2008: 174)。また、第 1 次世界大戦の時とは異なり、アフリカ兵は第 2 次世界大戦では、北アフリカのほか、イタリアや中東、アジアに送られていた。かれらが重用されたのは「日本軍との戦場となったビルマ戦線である。ジャングルでの生活に適し、マラリアにも強いという理由で、かれらは兵士としてまた物資の運搬役などとして、重宝がられたのである」 (木畑 2014: 170)。

第 2 次世界大戦ではイギリスは戦争継続のためにゴールドコーストから約 6 万 5 千人の若者が兵士として動員した。戦後、多数の帰還兵が戦地から戻ることになり都市の若者の失業問題をさらに悪化させていた。このような状況のなかで都市の民衆の蓄積されていた不満が爆発するできごとが起きることになる。

2 月 23 日 (月曜日)、復員兵たちはデモ行進に参加し政府に嘆願書を提出している。27 日 (金曜日)、パラジウムで開催された 2 回目の大衆集会においてダンクァ、アクフォ・アッド、ウィリアム・オフォリ・アッタ、オベツェビ・ランプティ (Obetsibi Lamptey) が集会で演説した。翌日の 28 日 (土曜日) の午後 1 時に、復員兵たちは旧ポロ・グラウンドに集結した。この日、ダンクァ、クィスト＝ゼルソン、オフォリ・アッタは同日の午前 7 時 30 分にはアクラを出てソートポンドに向かっていった。かれらがアクラ騒擾に関与していたかどうか後に争点となる。このアクラ騒擾はゴールドコーストのナショナリズムの運動にとってもきわめて重大な事件となったのである (Apter 1955: 169-170; Austin 1961: 282-283; Boahen 1975: 162-163)。その後の復員兵たちのデモと事件については、シンクルマも『自伝』のなかで詳細に語っている。

「ボイコットの中止されたのと同じ 1948 年 2 月 28 日に、復員兵同盟の平和デモが行なわれた。この 2 つの事件は本来何の関係もなく、同じ日にこれが起こったのも単なる偶然

ガーナの政党政治とナショナリズムの目覚め

にすぎなかった。復員兵のあいだに広まっていた不満は、私もよく知っていたし、UGCCの総書記として、仕事を通じて復員兵同盟ともつきあっていた。事実、私は適当な時期にかれらを、私たちの運動の一翼として組織するつもりでもいたのだ。かれらが不満を総督に示すために平和デモを行なう計画を立てていたことも、私は知りすぎるほど知っていた。しかしこのデモがあのような悲劇的な結果を導こうとは、私や他の誰が予想しただろう。

事件は復員兵の一隊がクリスチャンボルグの十字路に差しかかった時に起こった。道路はここで分かれて、総督の官邸のクリスチャンボルグ宮殿に向かっていた。デモ隊は指定された道筋をこの時すでに通り越していたが、十字路に差しかかった時、警官から停まれと命令された。復員兵たちは、平和デモだという理由で、この命令を拒否した。そのためにデモ隊と警官隊とのあいだに衝突が起こったが、その最中に警官隊を指揮していたヨーロッパ人の警部が部下に発砲を命じた。その結果、復員兵2名が即死し、5名が負傷した。ちょうどボイコットが終わり、アフリカ人の買い物客が群がっていたアクラの繁華街にこの発砲の知らせが伝わった時、民衆が激昂したのも当然すぎるほどだ。数分ののちには全市に騒擾がおこった。アフリカ人たちは、ボイコット中止の条件の一つとしてヨーロッパ人とシリア人の商人が前から声明していた価格の引き下げを行なわなかったことを攻撃しはじめ、それにともなって暴動と掠奪がおこり、数日間継続した」(Nkrumah 1957: 76-77; ンクルマ 1960: 81)。

暴動はアクラから、ンサワム、コフォリドゥア、ンココー、クマシの都市に飛び火した。植民地政府はナイジェリアから兵士たちを配属せざるを得なかった (Boahen 1975: 162-163)。

アクラで暴動が起きた2月28日には実行委員会はソートポンドで開催されていた。委員会のメンバー、アクフォ・アッドが午後5時30分にアクラで暴動が起きたことを電話で事務所に知らせてきた。ダンクァ、クィスト＝ゼルソン、ンクルマたちはただちにアクラに戻ることに決まった。ソートポンドを出発したのが午後6時でアクラに着いたのは午後8時30分を過ぎていた。ダンクァは次のようにワトソン委員会で証言している。

「私は恐ろしい光景を見た。町の中心部で私が見たのは大きな自動車——最初に衝撃を受けたのは保険会社近くの自動車だ——ひっくり返って燃え尽きていた。チャーラム近くの別の自動車も他の自動車も同じだ。私はハイストリートまで行った。キングスウェイ・ストアの全部が略奪されてガラスが破れていたのを見た。それは恐ろしい光景だった。私はステーション・ロードを歩いて歩いた。何か所かでまだ略奪が続いているのを見つけた。人びとは興奮して通りに飛び出し物を持ちだしていた。私は警官たちが何もすることなく傍観しているのを見たし、警官のなかには略奪に参加するものもいた」(Austin 1961: 284)

ソートポンドにいたンクルマもアクラに駆けつけていた。ンクルマは『自伝』のなかで次のようにアクラの騒擾について語っている。

「アクラに着くと私はただちに党のアクラ支部の指導者たちの会合を開き、その後で現状を見るために街を見回った。誇張されていると私が信じこんでいた報道が、実際は、生

じた騒擾と破壊をむしろ過小評価していることがわかった。暴動と略奪はもはや收拾できない状態であり、ユナイテッド・アフリカ社やユニオン・トレーディング会社などの大きな店舗を含む多くの建物が燃えあがっていた。この騒擾の結果、29人の死者と237人の負傷者が出た」(Nkrumah 1957: 77; シンクルマ 1960: 81-82)。

シンクルマ、ダンクァ、オフォリ・アッタたちは夜遅くなってアクラ支部に集まった。ワトソン委員会の報告書によると、ダンクァはセコンディにいるグラント議長に電話をして「いいかい! グラントさん、つい今日の午後、『われわれはゆっくりと進むべきだ』と君は言っていたね。『総督はリコールされるべきだ』ということにあなたは同意しますか。『もちろん同意するよ。やりたまえ』とグラントは言った」(Colonial Office 1948)。

また、ダンクァは「植民相宛ての電報の草稿を書いた」と証言している。「民政ゴールドコースト」で始まり「統一ゴールドコースト会議の実行委員会の暫定政府宣言」で終わる8千字もの長い電信が議長の名前で植民地相に送られた。これに対して、シンクルマの電信はもっと短かったようだ。しかし、「議事録」によると、文面をめぐって長い討論が続いたという(Austin 1961: 284)。ダンクァとシンクルマの権力争いが電信の草稿にも見えるようだ。電信の写しは、国連事務総長、パン・アフリカン・ニューズ・エイジェンシー、西アフリカ学生連盟マガジン社、ユナイテッド・ニグロ社、ニューヨーク・タイムズ社、モスクワのニュー・タイムズ社に送信された(Austin 1961: 284; Appiah 2004: 105)。

シンクルマはこの電信について『自伝』のなかで次のように語っている。

「重大な事態に直面していることを知って、私は実行委員会を召集し、植民相——当時はアーサー・クリーチ・ジョーンズ(Arthur Creech Jones)だった——に電信を送ることを決定して、その文案を審議した。私たちの要求を伝えるのに何よりも必要なのは要点を簡単に記した電信だと私は考えたが、ダンクァの考えは違っていた。その結果、ダンクァの書いた長い電文と、私の書いた電文の2つが発信された。これらの電文のなかで、行政権を首長と民衆の暫定政府にすぐに移し、憲法会議を即時召集するための特別委員を、民衆と首長のためにただちに派遣してほしいと要求した。この電信だけでゴールドコーストのイギリス帝国主義を倒そうとは私たちも期待していなかったが、同時に、私は、この機会を失ってはいけないとも考えたのだ」(Nkrumah 1957: 77; シンクルマ 1960: 82)。

ダンクァの電文はわからないが、シンクルマの電文はアッピアの『血の土曜日』によると次のようなものである。

「非武装の復員兵による平和デモは許可を受けたにもかかわらず、警官は全然挑発を受けていないのに発砲した。数人が死亡し多くのものが負傷した。警察及び政治指導者たちは生命と財産を守れない。状況を制御できない政府官庁は秩序を回復してほしいとUGCCの幹部である民間人に訴えてきた。商業地域のおもな商店は略奪された。ユナイテッド・アフリカ会社の店舗は全焼した。人民は今すぐ自治を要求する。総督をリコールせよ。憲法改正会議設置を監督する委員会を送れ。緊急事態である」(Appiah 2004: 105)。

この歴史小説はアクラ騒擾の復員兵たちを描いたものである。この歴史小説には殺害さ

ガーナの政党政治とナショナリズムの目覚め

れたアティポエ伍長とアジェティ軍曹のことが詳細に論じられている。また、この小説には復員兵組合の書記であるタマクローも登場する。背が高く体格の良い40代初めの男で、丸い銀縁のメガネをかけた人物として描かれている。

復員兵組合というのは1920年に第1次世界大戦に従軍したゴールドコーストの復員兵たちの苦情を植民地政府に注意をひかせるために設立されたもので、植民地政府の承認も得ており、ゴードン卿とアラン卿の二人の総督もパトロンになっていたという。

第2次世界大戦が始まると総力戦のためにゴールドコーストの青年を入隊することを支援してくれる機関として組合に接近してきた。しかしながら、戦後、復員兵たちに対する約束を反故にする植民地政府に大きな失望といらだちを募らせたのである。ンクルマはロンドンでビルマや中東で兵役についた人びととの出会いの経験から次のように語っている。

「兵士たちは自分たちの低い生活水準を自覚し、ゴールドコーストに帰るとすぐに高い生活を要求し始めた。これが、現在存在する植民地支配のもとで政治権力を獲得する道を発見できないでいた教育のあるアフリカ人の喪失した感情とともに、ナショナリズムを煽動する肥沃な土壌となっていた。この政治的社会的困難の自覚と戦後の社会不安とが、1948年2月と3月の危機を導いたのである」(Nkrumah 1957: 74; ンクルマ 1960: 79)。

ンクルマは「私がアクラにいる間に、警察がUGCCの指導者を探しているという噂が伝わってきた」とシケープコーストに移り、「UGCCの6人のメンバーを検挙する準備が進められている」という知らせがふたたび届いた。のちに「ビック・シックス」として有名になったのは、ダンクァ、オフォリ・アッタ、アクフォ・アッド、アコ・アジェイ、オベツェビ・ラムプティと私である」と書いている(Nkrumah 1957: 78,79; ンクルマ 1960: 82,83)。

ゴールドコーストの総督が「非常事態法」を発表したのは1948年3月4日(木曜日)である。その条文は「何人たりとも公衆の安全、法と秩序の維持、社会生活に必要な公益事業に侵害するような態度で世論に影響を及ぼしてはならない。有害な出版物は禁止する。世論または静穏を不安、失望、侵害することを招くような行為、演説、出版、執筆したものには禁固または罰金または双方を課す」というものであった(Appiah 2004: 113)。

その日の午後12時45分に、総督はラジオ放送局で公衆の安全を侵害するような噂の芽を摘みニュースの削除する「検閲制度」について告知している。「非常事態法」は法と秩序を維持するうえで不可欠なものであることを正当化するものであった(Appiah 2004: 113)。

「非常事態法」を発表した2日後には大衆運動はロンドンにおいて激しく展開することになった。3月6日(土曜日)、ロンドンに留学する西アフリカの学生たちがゴールドコーストの人びとの支持を訴えて大規模な抗議集会を開いた。かれらはディアスポラ及びヨーロッパに散らばるアフリカ人の支持をもとめたものである。また、WANSのT・A・バンコーレ(T. A. Bankole)とオラビシ・アウナー＝レンナー(Olabisi Awooner-Renner)の指導のもとに、約2千人が騎馬警察隊及び徒歩警察隊の監視のもとにダウニング街10番地にある首相公邸までデモ行進し、クレメント・アトリー首相(Clement Attlee)に決議文を提出している。続いて、行進はラッセル広場からトラファルガー広場まで進行した。抗議集会

には、W・シルバーマン労働党下院議員 (W. Silverman)、西インド諸島のジョージ・パドモア、インド代表のD・M・パテル (D. M. Patel)、イギリス労働組合のJ・グラール (J. Grahl) など著名人たちが参加した。決議文では「ゴールドコーストの退役兵組合書記長のベン・タマクロウの即時釈放すること、出版規制を解除すること、暴動と略奪を調査するために独立した調査委員会をゴールドコーストに派遣すること、〈今すぐ自治を〉、憲法議会を創設すること」をもとめている。

ロンドンの抗議集会の1週間後に、ゴールドコースト植民地政府は「緊急事態権限総督令」を通過させている。この法令は3月13日に官報に掲載されたが、3月11日に効力を発するものと定められた。具体的には、緊急(一般)布令中の第29条令1948年「緊急事態によって布令中に挿入された(一般)(修正)(第2)条令1948年」の条項のもとに移送命令が定められた。これを受けて、6通の移送命令が1948年3月12日(金曜日)付けてジェラルド・クリーシ総督 (Sir Gerald Hallen Creasy) の署名のもとに発行された。翌日の3月13日(土曜日)の午前中に移送命令が執行された (Appiah 2004: 114)。

ンクルマの逮捕については『自伝』にも書かれており、「その夜私は、ヨーロッパ人の巡査部長2人と私服2人に突然叩き起こされた。起きて、一緒に来い、かれらは荒々しく命じた」(Nkrumah 1957: 79; ンクルマ 1960:83) という。移送命令には「通称クワメ・ンクルマを逮捕し、拘留し、ゴールドコーストの、後に余の署名のもとに指定さるべき場所に、可能なかぎり速やかに拘禁しつつ移送することを命ずる」と書かれていたという (Nkrumah 1957:80; ンクルマ 1960: 84)。

これに対して、ダンクァは「いつもの癖で土曜日は朝早く起きて、いつもの通り蓄音機でベートーベン協奏曲第9番を聴いていた。音楽が聴き終わらないうちにドアをロックする音がした。ホールにある時計を見ると午前6時5分だった。(中略)。ドアを開けると警官——警部補が立っていた」という (Appiah 2004: 114-115)。

ダンクァの移送命令はンクルマの文面と同じ内容のものであった。他の実行委員会のメンバーたち——アクフォ・アッド、アコ・アジェイ、ウィリアム・オフォリ・アッタ、オベツェビ・ラムプティにも移送命令が出された。「指定さるべき場所に、可能なかぎり速やかに拘禁しつつ移送する」という命令のとおり、ンクルマたちは逮捕されて拘禁され移送された。ンクルマは『自伝』のなかで「逮捕と拘留」について詳細に語っている。

「数時間も走ったと思われた後で、護送車は停まった。外に引きだされると、飛行場だった。そこで5人の仲間と一緒にになった。それが私をかなり元気づけた。その時まで、逮捕されたのは私ひとりだと信じていたのだ。やがて私たちは飛行機に乗せられて、アシャンティ州のクマシに向かった。そこで刑務所に3日間保護拘束された。(中略) 拘留3日目の早朝に、私たちは突然起こされてすぐに荷物をまとめて午前3時に出発する準備をするよう命じられた。(中略) 私たちはバスでクマシを出発し、約8時間後に北部諸領の首都タマレについた。(中略) 町の郊外の小屋に連れていかれ、そこで3日間監視された。その後6人は離されて、北部諸領のあちらこちらへ別々に連れていかれた。だがどこへ連れてい

かれるのかは誰にもわからなかった」(Nkrumah 1957: 81-83; ンクルマ 1960: 85-86)。

ンクルマはタマレ刑務所, アクフォ・アッドはイェンデイ刑務所, ウィリアム・オフォリ・アッタはワ刑務所, アコ・アジェイはナブロンゴ刑務所に監禁された。ンクルマは『自伝』のなかで次のように語っている。

「孤独だった監禁が6週間ほど過ぎたある夜, 地方弁務官が私の小屋に来て, 翌朝アクラに出発するために, 荷物をまとめておくように命じた。つぎの朝早く, 1台のトラックがきた。あちらこちらで5人のメンバーを次々に拾ったのち, 私たちはタマレに着き, アクラ行きの飛行機に乗った。アクラに着くと, 空港のあるリスボンホテルの別館に入れられた」(Nkrumah 1957: 84; ンクルマ 1960: 87)。

2.3 ンクルマとダクァの確執

ここにUGCCの指導者たち——いわゆる「ビッグ・シックス」が出そろうことになる。ダクァ, アコ・アジェイ, ウィリアム・オフォリ・アッタ, ンクルマ, オベツェビ・ランプティ, アクフォ・アッドである(この名前の順番は, ガーナの1セディ紙幣に描かれたものによっている。前列にダクァからウィリアム・オフォリ・アッタが, ダクァの後ろにンクルマが後列に並んでいるという図柄である)。

ダクァ, ウィリアム・オフォリ・アッタ, アクフォ・アッドはアチェム(Akyem)の出身であり「アチェム・トロイカ体制」と呼ばれている。ダクァとナナ・オフォリ・アッター一世は異母きょうだいであり, ナナ・オフォリ・アッター一世は1943年に死去しており, ウィリアム・オフォリ・アッタがオフォリ・アッタ2世を継承している。つまり, ダクァとウィリアム・オフォリ・アッタは叔父と甥の関係である。また, アクフォ・アッドはアクアペン(Akuapem)の出身だがウィリアム・オフォリ・アッタの妹と結婚している。つまり, ダクァから見ればアクフォ・アッドは姪の夫でもある。ンクルマはンジマ(Nzema)の出身であり, アコ・アジェイとオベツェビ・ランプティはアクラを基盤とするガ(Ga)の出身である。

アクラ騒擾はンクルマとダクァとの間の亀裂を深めることになった。ンクルマが「実行委員会が騒擾に直接に関与した」という答申を出してくれることを喜んで受け入れようとしたのに対して, ダクァたちはそうではなかった。かれらはンクルマの行動計画を受け入れなかったと, ワトソン委員会に強く抗議した。すなわち, かれらは「行動計画を十分に読んでいなかったし, 容認もしていなかった, また今でも容認していない」と抗議したのである。ンクルマと実行委員会との間の気質, 経験, 地位という大きな違いがワトソン委員会の委員たちの前で明らかになったのである。

グラントはンクルマの綱領の草案の最後の部分を読んだ時, この老人は憤慨したと語る。グラントはワトソン委員会の委員に質問されて「私は会合で草案を読んだことは決してない」「もし草案を読んだとしたら, 承認されたとも言うのですか?」「われわれは草案を却下したのだ」とグラントは答えた。さらにグラントは答えている。「かれがやりたいようにはさせなかった。われわれ老人たちが好ましくないものに同意にすることはあり得ない。

若い男の思い通りにさせることを許すとでもいうのかね。答えはノーだ」。

ダンクァもワトソン委員会において「草案を読んだことはないし、激しく反対しわれわれの議事録から削除されるべきではないかと尋ねた」と答えている。また、デ・グラフト＝ジョンソンはダンクァの暫定政府を要求する電報は「時期尚早である」と答えている (Austin 1961: 284)。この証言とは対照的に、ンクルマは『自伝』のなかで「この草案は原則的には承認された。——後にワトソン委員会で否定した委員もいたが、そしてこの計画にしたがって組織を全面的に活動させるよう私は要請された」(Nkrumah 1957: 72; ンクルマ 1960: 77-78) と語っている。

「議事録」によると、ンクルマとダンクァとの間の亀裂は 1948 年の遅くとも 8 月頃から生じたとされている。7 月にダンクァが 9 月に開催される植民地省主催のロンドンアフリカ人会議 (London African Conference) に出席することに決まった後のことである。ロンドンアフリカ人会議は 9 月にロンドンで開催された。この会議に出席したダンクァは、フェビアン植民地局が発行するパンフレットに「友好関係と帝国—アフリカ会議の教訓」と題する論文を書いている。このパンフレットにはこの会議に出席した集合写真が収められている。ジョージ 6 世 (George IV) を中心にゴールドコーストのナナ・トゥシブ・ダーク卿 (Nana Sir Tsibu Darku of the Gold Coast), ナイジェリアのカツィナ王 (Emir of Katsina from Nigeria), クリーチ・ジョーンズ植民相が前列に並び、ダンクァたちが背後に立ち並んでいる (Danquah 1949: 3-17)。なお、クリーチ・ジョーンズ植民相はダンクァの結婚式に参列したことがあるという。ンクルマは、ダンクァがロンドンのアフリカ人会議に出席するという決定を 7 月下旬にキビ (ダンクァ, オフォリ・アッタの地盤) で行なわれた集会でダンクァたちを批判したことで、詫び状を書かせられていた。

UGCC の組織は、急速に伸びており、「議事録」によると、1948 年 8 月には 229 の支部ができあがっていた。これに対して、ンクルマは「6 か月以内に、植民州だけで 500 の支部をつくることができた」(Nkrumah 1957: 73; ンクルマ 1960: 79) と語っている。

実行委員会のなかに特別委員会がつけられ、事務所の運営を改善するためにオベツェビ・ランプティとウィリアム・オフォリ・アッタの二人委員会を任命した。ところが、ランプティとアッタは事務所の運営を改善するための調査をしないで、ンクルマが党の集会にいつている留守に事務所を訪れて来て、ンクルマの手紙を調べたということが発覚している。ンクルマは『自伝』のなかで次のように書いている。

「別に重要でもない手紙だったが、そのいくつかに私が『同志』という言葉を使っていたので、私が共産主義者だという確実な証拠として、それに飛びついたものらしい。

二人が没収して騒ぎをひきおこしたもう 1 通の手紙は、党員の一人から来たもので、その男は、手紙のなかに、UGCC に超自然的な力を与える方法を知っていること、もし私が希望するなら、その準備をしておこうと述べていた。そんな力をあなたがもっているなら、UGCC の実行委員会に自分ででてきて、実行委員会の全員にそれを見せるのが一番良いだろうと、と私は答えておいたのだ」(Nkrumah 1957: 88; ンクルマ 1960: 91)。

「議事録」によると、アクフォ・アッドは「なぜ君は挨拶の言葉に『同志』という文字を使い続けているのか」、「なぜ君はまだ WANS との関係が続いているのか」、「なぜ君はワトソン委員会が暴動の責任を会議に負わせることを歓迎しているのかね」と立て続けに詰問している。

ンクルマの『自伝』には「実行委員会からさまざまな非難が私に向けられた。予想どおり、『同志』という言葉にかれらは恐ろしく激昂していた。かれらにとってはこの言葉は共産主義との明白な同義語だったのだ！『これはかれが共産主義者である証拠ではないか』とかれらは尋ねた。あまりの無知に驚き、私は返事をしなかった。かれらが続いて何を言いたすのかを聞くことにした」（Nkrumah 1957: 88-89; ンクルマ 1960: 91）と語っている。

また、ンクルマは「ニイ・クワベナ・ボンネ（Nii Kwabena Bonne）もボイコットの支持者たちも UGCC のメンバーではなく、この運動が会議と何の関係もないことは私にはよくわかっていた。しかし自治政府の樹立を煽動していた私たちが、私たちの政治的な目標に役立つと認められれば、表面化されたどんな不満も利用するつもりでいたことは正直にいうておこう」（Nkrumah 1957: 75; ンクルマ 1960: 80）と語っている。

チャールズ・アーデン＝クラーク卿（Sir Charles Arden-Clarke）をして「アクラ騒擾はインドの基準からすればたいした問題ではないが、ガーナの基準ではこれが問題だった」と語らしている（Arden-Clarke 1958: 30）。

ンクルマの返事に実行委員会は満足しなかった。ンクルマは「実行委員会は、UGCC の名で私のやりとげたことに、何の好意もしめさなかった。かれらはあらゆることに激しい不満を投げかけた」と語っている。

「議事録」によると、ンクルマは「本日付けで〔8月21日〕総書記の職務を停止させられた」、また「裁判にかけるのに要求されるかれに対する非難が知らされた」と書かれている。また、総書記の停止期間にかれは給料を受けとったとも書かれている。デ・グラフト＝ジョンソンが総書記代理となった（Austin 1961: 286）。

次の実行委員会はアクラのナナ・オフォリ・アッタの家で9月3日に開催された。——ンクルマはさらなる非難をあびた。ンクルマが『アクラ・イブニング・ニューズ』（*Accra Evening News*）を発行するという冒険的事業を行なったためである。UGCC に半分足をつっこみ、半分足をはみだしているようなンクルマのスタンスが実行委員会のメンバーに嫌われたのである（Austin 1961:286）。議長はンクルマの総書記を解任することを要求した。『アクラ・イブニング・ニューズ』の第1号ができあがった日に、実行委員会はンクルマを総書記の地位から追い出すことになったのである。それまで格闘の日々が続いた。

「私は総書記をつとめていた間じゅう、運動の機関紙になる新聞をつくることが必要だと、実行委員会に熱心にときつけてきた。だが実行委員会はそれに耳をかさなかった。そのためにわれわれの全部が治安攪乱事件にまきこまれる危険がある、というのが口実だった。私個人は、大衆のすみずみまで政策をひろく伝える効果的な手段をもたずに成功した解放運動を、かつて見たことがなかった。（中略）私は新聞の発刊に着手した。（中略）最

初から『アクラ・イブニング・ニュース』は運動の前衛となり、その主要な宣伝・煽動・動員・政治教育者となった。その紙面をとおして民衆は毎日、自由のために闘い、腐敗した植民地制度と帝国主義の仮借ない非道さを心に刻みこまれた。

資金がないために、最初はペラ1枚の新聞しか出せなかった、それに主論文、社説、「煽動者のコラム」のほかに、人びとからもっとも怖れられ、噂のタネになった『散歩者（ランブラー）』というコラムがあった。『ランブラー』のあつかう記事には何の制限もなく、ランブラーの眼と耳はあらゆる場所にあつて、ねらった人びとを摘発するのにいささかも躊躇しなかった。（中略）新聞に対する要求はひじょうに大きく、私たちの小さな機械で印刷できる小部数を、群集はむさぼるように待ちかまえ、相場表のように手から手へ渡した。その取引が新聞の値段を高めて、しまいには1部が6ペンスで売られるようなことも起った。字の読めない人びとは仲間をつくって、字の読める人に記事をはじめから終わりまで読んでもらった。見出しをかねてのせた標語が、やがて人びとの口に頻繁にのぼりはじめた。『われわれは平穏な奴隷の身分よりは、危険のともなう自治を選ぶ』、『われわれは人として生きる権利をもつ』、『われわれは自らを治める権利をもつ』。新聞の評判にもかかわらず、私たちには儲けがなかった。売って得た金の全部が、使っている者への払いと、印刷用紙や新聞を続けるためのその他の備品の購入にあてられたからだ。広告は、新聞の方針が広告主によって左右される不安があったため、全部ことわった。いずれにしろ広告をだせるのは、帝国主義と資本主義的商人だけであり、かれらが私たちの新聞と喜んで提携するなどとはどうも考えられなかったからだ」（Nkrumah 1957: 93-94; シクルマ 1960: 95-96）。

政治運動のために『アクラ・イブニング・ニュース』のような新聞が有効な手段であることに気づいて、実行委員会は『ステーツマン』（*Statesman*）という週刊新聞を発行した。この新聞は発行からわずか2、3か月で消え、続いて『ナショナル・タイムズ』（*National Times*）、『トーキング・ドラムズ』（*Talking Drums*）という新聞も発行されたという。〈真実を知りたいなら『アクラ・イブニング・ニュース』を読め〉というのが国中の通り言葉となった」という（Nkrumah 1957: 95; シクルマ 1960: 97）。

その後、シクルマは誹謗事件にまきこまれて1万ポンドに達する賠償を要求されることになる。シクルマは「請求者は全部役人で（中略）役人たちは私を莫大な訴訟事件にまきこんで、私が意気消沈し、『アクラ・イブニング・ニュース』とともに世間から消えさるのを願っていたと聞いた」と語っている（Nkrumah 1957: 95-96; シクルマ 1960: 97）。

デニス・オースティンは次のように述べて結論づけている。

「この最初の居心地の悪さは後になるまでとりあえず棚上げされた。ダンクァとシクルマはUGCCの名前でともに闘った。しかし委員会はシクルマに関するかれらのアンビバレンスを克服することができなかった——つまり、かれを使いたいと望んでいることと、シクルマが彼らの名前で実行していることを受け入れる必要がある（すぐにでも否定する用意がある）というまったく相反した感情が共存している。しかし、かれをぬきにしても実

行していることに不安が増大しつつあったのである」(Austin 1970 (1964): 55)。

3. 新しい政党の誕生

ンクルマとダンクァとの間の亀裂が生ずる第2の転換点は、1948年12月に設置された憲法草案に関する委員会——コーギー委員会にUGCCのメンバーがはいったことである。具体的には、アクフォ・アッド、ダンクァ、グラント、ランプティ、ナナ・オフォリ・アッタ2世、クィストである(Colonial Office 1949)。

1949年1月8日に開催された実行委員会においてダンクァはンクルマに青年組織について尋ねられている。——その時、ンクルマは会計係として在籍していた。

「実行委員会をもっとも困惑させたのは、私が青年学習グループの組織の責任者となっていたことだ。このグループはのちにアシャンティ青年協会(Ashanti Youth Association)やセコンディのガーナ青年協会(Ghana Youth Association of Sekondi)とともに、ナショナリズム青年運動と連動して組織化された。私と実行委員会の委員たちとの見解の相違の最初の徴候が拘留中に出てからは、遅かれ早かれ最終的な決裂が起るに違いないと私は考えていた。それで決裂が起った時、背後に大衆の強い支持を得ておく方向に組織運動をすすめていく決心をした。私はアクラのオス地区の青年たちを集めて青年学習グループをつくったが、当時は総書記としての仕事あまりにも忙しかったので、グループの指導はしても、責任者として束縛されたくなかった。それで、アクラに同居していたコムラ・グベデマー(Komla Gbedemah)にグループの議長となってもらった。会合はグベデマーの家で定期的にかれた。青年組織委員会の目的は、実行委員会に反対して活動することではなくて、むしろ民族運動の青年部の形をとることだった。それによってこの運動をさらに強力におしすすめることを目指していたのだ。実行委員会の委員たちはこの組織の結成に激しく反対した。〈今すぐ自治を〉という綱領を掲げている青年たちはUGCCの綱領〈なるべく早い自治を〉に批判的でありすぎるとかれらは考えたのだ。だが、かれらの反対の根底には、この青年組織が、特権のない階層、または急進的な社会層で構成され、下層の民衆の経済的、社会的、政治的要求を表現しているということがあった。つまり青年組織委員会は、かれらの保守的な考えとは完全に対立していたのだ」(Nkrumah 1957: 96-97; ンクルマ 1960: 97-98)。

「議事録」によると、青年運動は会議の「同盟」であると答えている。実行委員会は「これらの組織とのミスター・ンクルマとの結びつきの背後にある動機づけを批評しているとともに試験的にこれらの組織の憲法をつくるべきだと要求している」。こうしたアンビバレンスは約6か月続いたという(Austin 1961: 288)。これに対して、ンクルマは『自伝』のなかで次のように語っている。

「この青年組織の責任が私にあるとかれらは考えたが、これはその通りでもあって、このことが私を解任したいとのかれらの欲求を強めた。しかしかれらにとっては不幸なことに、その意図を公けにしまったので、UGCCのなかで青年組織委員会を支持してい

た人びとと実行委員会とのあいだに、おおっぴらな衝突が起こった。民族運動をこの瞬間まで完全に支配していた実行委員会の委員たちが、この運動の急進的、進歩的な派を私が代表しているという理由で私を追いだしたがつていることが、誰の眼にも明らかになったのだ」(Nkrumah 1957: 97; シクルマ 1960: 98)。

次の実行委員会は、1 か月後に、アクラのダンクァの家で開催された。実行委員会は憲法改革に関するコーギー委員会の報告を待って〈なるべく早い自治を〉を実現しようとしていた。これに対して、シクルマは1948年12月23日から26日までのクリスマス休日にクマシでガーナ青年会議を開催することになっていた。しかし、「会議を開く当日になって」「平和をみだす危険があるという理由で警察が集会を禁止した」ことを知ったシクルマは「非公式の秘密会議」を開くことになった。

「この会合で、『自治政府に向かって』という題で公にされたガーナ青年宣言が起草された。この宣言は一種の憲法の形をとっていたが、青年組織委員会ではその月に開かれる予定のコーギー委員会で討議の材料に使われるだろうと考えて、写しの1部をコーギー委員会にあてて送った」(Nkrumah 1957:99; シクルマ 1960: 99-100)。

1949年2月20日に開催されたソートポンドでの会議でシクルマとダンクァとの間の亀裂は「最後の終結」の予備的な段階に達したという。

「議事録」によると、「昨年8月以来、シクルマと実行委員会の間には情勢は何も良くなっていない。かれをもっとも悩ましているのは実行委員会のアクラの委員によって書かれたと言いつて立っている手紙のことで、かれを国外追放することを政府高官に勧めているというものである。(中略)大衆は会議の目的にかれが貢献していることを認めている。[しかし]かれは機関としての実行委員会には理解されていない。かれは会議の旗じるしのもとで国じゅうの青年のすべての支部において集会をして青年組織を推進すると請け負った。[また]ガーナ大学は会議の面目を保つと言つたはずである」と書かれているという(Austin 1961: 289)。

シクルマは復活祭の3週間前に、青年組織委員会の会議を開いている。

「青年組織委員会の会議をまた開く手はずをととのえた。UGCCの復活祭集会に対する準備教育を青年たちにあたえておくためだった。しかしこれはいらない手はずだった。UGCCの復活祭集会がソートポンドで開かれはしたが、実行委員会の委員たちは予定のプログラムをすすめるかわりに、かれらの集中力とエネルギーの全部を集中して、第1に、私が個人秘書を委員会の承認なしに任命して会議の資金から給料をあたえていたという理由で、個人秘書を即時解雇せよと私に要求すること、第2に、党の総書記への私の復職を拒絶することを議論し、決定した。会議はそれで終り、実行委員会と青年組織委員会のあいだにすでにまかれていた不和の種子は、いっそう深く根をおろした」(Nkrumah 1957: 99-100; シクルマ 1960: 100)。

UGCCと青年組織委員会の「青年」との間に完全に亀裂が生じたのは1949年6月6日になってからである。グベデマー37歳、ボッチオ33歳、シクルマ40歳である。1週間も

経たない内に破局が訪れることになった (Austin 1961: 291)。

実行委員会はその後の1週間も経たない6月11日に開催された。二つの解決策が提示された。「議事録」によると、(1) 青年組織委員会は会議の会員と不和の状態となっている。「青年組織委員会が会議に対抗している」「国の統一戦線を破壊することを決めている」という理由によるものである。(2) クワメ・ンクルマは責任をとらなければならない。また、「青年組織委員会が代議員総会によって廃止されたにもかかわらず [かれが] 青年組織委員会の諸活動に関与し続けている」。さらにかれが「共同責任の義務と党の原理を無視しており (中略) 『アクラ・イブニング・ニュース』において、実行委員会の諸決定を非難し誠実性を問題視する意見、見解、批評を公表している」「かれは会議の名誉を傷つけるものであり、また会議の指導者たちを罵倒し、会議のアイデアを盗用している」という理由によるものである (Austin 1961: 291)。

しかし、青年組織委員会はすでに UGCC を離脱することを決めていた。1949年6月のはじめに「青年組織委員会は、タルクワで特別会議を開いたが (中略) 討議は3晩続き、早朝までかかった」とし、「私の UGCC 総書記の解任を黙認してよいかということ」と「青年組織委員会が真の政党にかわる時期にきているのではないかということ」という二つの問題が討議された (Nkrumah 1957:100; ンクルマ 1960: 101) とンクルマは語っている。

ンクルマは CPP の発足する日を6月12日と決めている。実行委員会は完全に裏をかかれた形となった。6月12日、それは日曜日だが、委員たちはソートポンドから移動してグラントが病気で寝ていたためセコンディで実行委員会を開催した。コジョ・ボッチオの電文が議論された。

UGCC と CPP の組織を比較すると、UGCC は首長、豪商、高学歴者などの「長い歴史のある知識人階級」たちからなる組織である (Austin 1970 (1964): 14)。これに対して、CPP はおもに青年たちからなり、広範囲な社会集団に属する人びとからなる組織である。「ベランダ・ボーイ」とよばれる青年とか充分には教育を受けていない人びとからなる組織である。エリートたちはかれらを「ならず者」とか「煽動者」と呼んで蔑んだ。

歴史学のジョージ・M・ボブ＝ミラーは「反動的弁護士たち」と「ベランダ・ボーイ」に対比している。前者が中世の寺院で修行した牧師、弁護士、成功をおさめた商人たちであったのに対して、後者はスタンダード7卒業生か多くは失業中か非正規雇用者たちであった (Bob-Miller 2014: 288)。ここに会議人民党の歴史が始まる。

追記

本稿では、Kwame Nkrumah の日本語として「クワメ・ンクルマ」を用いている。学界でもこれまでの著書や論文や教科書で用いられてきた「エンクルマ」では適切さを欠くという観点から「ンクルマ」に改められている。したがって、本稿では『自伝』の訳書の引用をするにあたって (ンクルマ 1960: 123) の表記を用いている。

参考文献

- Apter, David 1955 *The Gold Coast in Transition*, Princeton: Princeton University Press.
- Appiah, Yaw Adjei 2004 *Bloody Saturday: A Novel about the Nationalist Struggle for Ghana's Independence*, Accra: Woeli Publishing Services.
- Arhin, Kwame 1990 *A View of Kwame Nkrumah, 1909-1972: An Interpretation*, Accra: Sedco Publishers.
- Austin, Dennis 1961 "The Working Committee of the United Gold Coast Convention," *Journal of African History* 2(2): 273-297.
- Austin, Dennis 1970 (1964) *Politics in Ghana 1946-1960*, London: Oxford University Press.
- Biney, Ama 2011 *The Political and Social Thought of Kwame Nkrumah*, New York: Palgrave Macmillan.
- Boahen, Adu 1975 *Ghana: Evolution and Change in the Nineteenth and Twentieth Centuries*, London: Longman Group Limited.
- Bobb-Miller, George M. 2014 "Verandah Boys Versus Reactionary Lawyers: Nationalist Activism in Ghana, 1946-1956," *International Journal of African Historical Studies* 47(2): 287-318.
- Colonial Office 1948 *Commission of Enquiry into Disturbances in the Gold Coast*, London: His Majesty's Stationery Office.
- Colonial Office 1949 *Gold Coast: Report to His Excellency the Governor by the Committee on Constitutional Reform*, London: His Majesty's Stationery Office.
- Danquah, J.B. 1949 *Friendship and Empire: Lessons of the African Conference* (Colonial Controversy Series No.5), London: Fabian Publications Ltd and Victor Gollancz Ltd.
- Davidson, Basil 2007 (1973) *Black Star: A View of the Life and Times of Kwame Nkrumah*, Oxford: James Currey.
- Figureire, Daurius 2007 *Tubal Uriah Butler of Trinidad and Tobago Kwame Nkrumah of Ghana: The Road to Independence*, New York: iUniverse, Inc.
- 木畑洋一 2008 *イギリス帝国と帝国主義—比較と関係の視座*, 東京:有志舎。
- 木畑洋一 2014 *二〇世紀の歴史*, 東京:岩波書店。
- Nkrumah, Kwame 1957 *The Autobiography of Kwame Nkrumah*, Edinburgh: Thomas Nelson and Sons Ltd.
- エンクルマ, クワメ 1960 *わが祖国への自伝*, 野間寛二郎訳, 東京:理論社。
- Sherwood, Marika 1996 *Kwame Nkrumah: The Years Abroad, 1935-1947*, Legon: Freedom Publications.
- Walton, Calder 2013 *Empire of Secrets: British Intelligence: The Cold War and the Twilight of Empire*, New York: The Overlook Press.

(2022年 9月 6日 受付)
(2022年10月19日 受理)